

令和4年度 練馬区立関中学校 学校経営計画

令和4年4月1日
校長 大澤 秀吉

1 はじめに

学校が存在するためには、「校地・校舎」「教職員」「生徒」がそろわなければ学校ではない。

「地域から学校を借りて教育に当たっている。学校は、生徒のためにある。」という大前提を踏まえ、生徒を第一に考えた学校運営や教育活動を展開していくことが重要である。

地域の学校として地域・保護者・生徒からの期待に応えるため、全教職員が教育への情熱と英知を結集して協働し、関中学校の令和4年度の教育を創造・充実していきたい。

関中学校は、歴史と伝統ある学校として、地域・保護者・生徒から信頼される学校でなければならない。

2 学校経営方針の根幹

大人や教師のカテゴリーにあてはめ生徒を一般化することなく、生徒一人一人をしっかりとらえ、個々の生徒の課題解決に向けた指導および支援を教職員一丸となり進めていきたい。

- (1) 生徒一人一人の違いを大切にした人権尊重をふまえた教育を展開し、生徒の命を第一とした教育を展開する。
- (2) 公立中学校は、「地域の中にあり、地域とともにあり、地域に支えられながら存在する学校」である。地域と連携し、ともにある学校を目指し学校経営を行う。
- (3) 教職員一人一人が専門分野・分掌での役割・学年での役割・地域連携などを意識して活動し、自己の能力を高め成長し続ける。
- (4) 未来を担う生徒に「目標設定→計画→実行→途中結果→振り返り(変更・継続)→結果」の過程を教師の指導・支援のもと身に付けさせ「どこでも、やっていけるたくましい生徒」を育成する。
- (5) 出来ない理由をあげるのではなく、解決志向・実践志向の積極的な学校運営を行う。「やればできる」「もっとうまくできる」と考える教師たちの姿勢。
- (6) 生徒が未来へ向けた「より良い判断」「より良い思考」をするための基礎学力を保障する。
- (7) 「学校における働き方改革推進プラン」に基づき「週当たりの在校時間が60時間を越える教員をゼロにする」を当面の目標とするとともに、年次有給休暇の積極的な取得を促す。
- (8) 校務用の文章は、例年通りではなく、だれが見ても要点がすぐつかめる形のものを作成する。
- (9) 災害、非常時、様々な事故にしっかり対応できるマニュアル作成し研修等を通じて共有することで、危機意識を念頭に置いた学校運営を行う。
- (10) 服務事故(体罰、暴言、不適切な指導・個人情報漏洩等)をゼロとする。

3 目指す学校像

本校の教育目標の実現のために、次のような「目指す学校像」を掲げる。

目指す学校像

- あらゆる他者の人権を尊重し、自他を大切にしながら協働できる生徒を育成する学校
- 未来は自分の力で創造できると信じ、目標の実現に努力する生徒を育成する学校
- 心身の大切さを自覚し、健康的な生活を送る生徒を育成する学校

関中学校は、令和4年度、開校48年を迎える。平成30年度より「練馬区・学校地域連携事業」をスタートさせている。この事業を活用しつつ、かつ、人権尊重を重視し、地域・保護者・生徒からより一層信頼される学校を目指す。かつ、関中学校は、生徒にとって「学びの場」であり「成長する場」であることを教職員が自覚し、学校として保証することが大切である。



令和4年度 スローガン

- 生徒にとって「学びの場」「成長する場」を保証する学校であること

4 中期的目標と方策

(1) 教育環境の整備

- ① 最大の教育環境は教師
教師の意欲、姿勢、行動、言葉遣い、服装などが、生徒に大きな影響を及ぼす。
日々、望ましい姿で臨み、生徒に範を示したい。
- ② 居場所のある学校（互いに尊重し認め合える環境）
生徒の個性は多様である。個々の生徒が安心できる場所、人と話ができる場所など様々な場や機会を提供する。
いじめや暴力の他、心無い発言によって、その生徒の居場所が奪われることが無いように各教科、特別活動、道徳などあらゆる機会を通じて生命の大切さ、人権、人はそれぞれ違うこと、人との関わり方を指導し、互いに尊重し認め合える環境を整える。
- ③ 一人一人が価値のあるちがう人間であることを、日々伝えていく。
同じ考えで物事を判断することは、不可能であることを共通理念とする。
だからこそお互いの違いを認め、共に生活するための手立てを考えられるような、場と機会を設け3年間でその下地を形成させる。
- ④ 生徒が主体となって活動できる環境
学校行事、学年行事、生徒会活動、係活動において、生徒が主体となった活動できる場と機会を教職員が意図的に作り出す。生徒と共にあり、教職員と生徒がともに成長する環境を育んでいく。
- ⑤ 様々な配慮が行き届いた環境
情緒の安定を図るために、全教職員が生徒とともに校舎内外の安全と美化に心がけ、生徒にとって安全で潤いのある教育環境を目指す。さらに、アレルギーの対応、不審者の対応、生徒のケガや事故の未然防止を重視する。
そのために、日ごろから危機管理意識を高め、アレルギーの聞き取りや食の安全と施設の安全点検を確実に励行し、安全確保と安全管理を徹底する。

(2) 地域等との連携を一層推進する

- ① 地域およびPTAとの連携を強化し、授業等、各種学校行事に、学校支援ボランティア・サポーターとして、保護者及び地域の人たちと教職員との連携・協力の下に教育活動を推進する。（学校図書館・グリーンボランティア・避難拠点訓練、防犯パトロール等）
また、公的機関との連携にも留意する。
- ② 学校だより、ホームページ、学年だより、学級だより、個人面談、三者面談、学校公開、道徳授業地区公開講座など、具体的な情報発信を適切に行い、保護者との信頼関係を深める。
- ③ 学級経営においては、日常の子どもの姿（向上・努力・課題・出来事など）が正確に保護者に伝わるよう、連絡や面談を適宜適切に行う努力をする。
- ④ 学校評議員による学校関係者評価を活用し、学校改善に努める。
- ⑤ 練馬区・学校地域連携事業では、学校支援コーディネータと連携し、地域の力を借りて、学校運営を押し進める。
- ⑥ 練馬区・学校地域連携事業を推進するため、「学校支援推進協議会」を設ける。
この協議会は、学校評議委員会開催のときに、同時に行う。
- ⑦ 地域未来塾では、学習困難などの理由で不登校傾向にある生徒の対応を行う。
- ⑧ 支援を要する生徒に対応する為、地域の協力を仰ぐ。

(3) 学校組織の活性化

- ① 校内分掌および校務内容を明確にする。
- ② 教育目標の実現に向かって全教職員が共通理解のもとに教育活動を推進する。
- ③ 個々の教職員が、その個性と特性を生かしながら共通の価値ある目標に向かって努力する。
- ④ 教職員一人一人が、経営参画意識を高め学校運営にあたる。
- ⑤ 時間の使い方を意識した会議や授業の設定を行う。
- ⑥ 学級通信を含む保護者や地域が目を通す起案文章は、主任→主幹→管理職が確認する。
- ⑦ 働き方改革につながる、何のために、だれが、いつ、何を、どうするのかを明確となった文章作りをする。

(4)新学習指導要領の円滑な導入

- ① 主体的な学びや探究的な活動の基礎となるスキルを習慣として定着させるために、「目標設定→計画→実行→途中結果→振り返り（変更・継続）→結果」を各教科、行事、部活動などあらゆる教育活動の場において実践する。
- ② 思考・判断する上で基礎となる知識を各教科において確実に指導する。
- ③ 総合的な学習の時間などを活用し、「課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現」などの探究する手法を取り入れ、スキルとして習得させる。

(5) 専門性の向上

- ① 教科や教育課題の他、個々の専門性を高めるために様々な研究会・研修会に参加する。
- ② 生徒と共に常に学び続ける教師として、教育分野に限らず多くの知見を得るように努める。

(6) 学校予算を適正に編成して執行する。

- ① 長期的、短期的な展望に立って予算を編成し、適切な執行を進めて円滑な教育活動を推進する。
- ② 公費、私費共に教師個人のお金ではなく、税金、保護者から徴収したものであることを忘れずに、速やかに厳正に執行する。
- ③ 私費会計での購入計画作成においては、本当に必要なものであるのか、使用頻度などを学年、教科でよく検討してから、物品の購入を計画する。
- ④ 会計事故につながる、現金・カードなどによる代金の立て替えを行わない。
- ⑤ 購入後は、速やかに会計処理を行い、学年や教科内で会計処理の状況をチェックする。執行状況を学年出納帳に明記して管理職が毎月点検できる状況にする。

5 令和4年度の目指す学校像を実現するための具体的な取組

(1) 校務内容の明確化

- ・教務部 教育課程の円滑実施のために
諸条件の企画立案・整備・調整などを行う
行事予定の作成・時程の管理調整・諸表簿の作成管理・時間割の作成
授業時数の管理調整、・校務パソコンの管理など
- ・生活・生徒支援部 より良い学校生活を送るために
学校生活を送る上での規律を育む
環境整備（清掃・教室配置・机や椅子などの用具）
人権と生命（人としての権利、侵してはならないもの）
自殺、いじめ、SNS、クロームブックなど
安全指導（火災・地震・日常生活など）
特別活動（生徒会・部活動・行事・学級活動など）場と機会の設定
健康・保健（給食・生活習慣・疾病対策など）
支援を必要とする生徒への対応（不登校や障害など）
○外部機関との連携、SCや心のふれあい相談員との連絡調整
○特別支援コーディネータとの連携、マイステップアップルームの可能性
○学校生活支援員の学年配置連絡調整など
- ・進路学習・研修部 自己のキャリアを踏まえた主体的な学びを行うために
学習習慣の定着に向けた取り組み
進路開拓・キャリア形成の基礎
（進学すること・働くこと・仕事に関する理解など）
総合的な学習の時間（課題解決に向けた探究活動の方法を学ぶ）
道徳（より良い生き方をするための考え方や態度の育成）
読書活動（学校図書館の使い方、ハートタイムの過ごし方など）
研修計画の作成・実施
他分掌からの研修要望の集約、講師への連絡・手配など
- ・経営支援・地域連携部 地域との連携を推進し、より良い学校経営が行われるために
分掌、学年、教科、部活動などが円滑に進むように予算だて、執行を行う
（部活動外部指導員の実績入力、地域連携事業の運用など）
地域未来塾の調整
他分掌等の要請を受け、地域との連絡調整や人材の確保を行う
研修講師の招聘に関する予算だてや事務手続き等

(2) 学校経営・学校運営の視点から

- ・チームとして建設的な意見交換を行う。
ただ否定するのではなく「理由」と「代案」をつける。
- ・職層に応じた仕事をする。
- ・最大の教育環境は教師であること意識した言動を実践する。
- ・体罰、個人情報など服務事故をおこさない。
- ・予算執行を適切かつ円滑に行い、会計事故をおこさない。
- ・常に、説明責任が伴うことを忘れない。
- ・教師一人一人が経営参画の意識をもち改善を心掛ける。
- ・自己の分掌・学年内の校務に対してタイムマネジメントを意識した取り組みを行う。
- ・組織運営が円滑に進行するように、文章作成を意識する。
- ・各分掌主任、学年主任に情報が集約され、教員間で情報共有がなされるようにする。
- ・保護者や地域の方々が目を通す文章は、必ず起案する。
- ・職員会議に出す場合、企画会議を通すものとする。
- ・校務分掌や学年分掌で何を身に付けるのかを明確にして校務に取組む。
- ・生徒の動きや変容をとらえ、現場責任者としての的確な判断行動をする。
- ・私費会計で購入した教材教具は速やかに生徒に渡す。

(3) 学習指導の視点から

- ・新学習指導要領に準拠した指導および適正な評価を行う。
- ・各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間に関する指導の改善を行う。
- ・職層に応じて指導助言を行う。
- ・教科内や教科間で指導法の工夫など話し合える環境をつくる。
- ・基礎基本を定着させようという話し合い活動を行う。
- ・単元指導計画、評価計画をたて、生徒保護者に説明できるようにする。

- ・50分間の授業展開、単元ごとの授業展開など時間管理を意識した計画とする。
- ・とりあえず問題集を解くのではなく、どのように学ぶのか学び方を指導する。
- ・頭を使って考えさせるために、より良い発問や教材を検討する。
- ・単位時間で学ぶべきことを明確にして授業を展開する。
- ・私費会計で購入する教材教具は生徒のためになるものか、生徒が望んでいるものか、保護者が望んでいるものかをしっかり検討して決める。
- ・個々の生徒の能力に応じた指導方法を検討する。
- ・標準偏差を活用し標準偏差1.2を目安に試験問題を作成する。
- ・標準偏差が大きくなるとフタコブラクダになるので下位層の指導方法を検討する。
- ・授業等で学校図書館を活用する。
- ・放課後、定期試験前、長期休業中など補習などの学習支援を行う。
- ・学力向上支援員を活用する。
- ・年間を通してハートタイム（朝読書）を実施する。

（4）生活指導・進路指導の視点から

- ・生徒主体となる場と機会を設定する。
- ・育てる生活指導を心掛ける。
- ・全教職員が、いじめ・暴力・暴言などを絶対に許さない姿勢で臨む。
- ・生徒の声にならない声を聞きとれるように心がける。
- ・心を育てるために、道徳などを活用する。
- ・人権に関する知識を高める。
- ・食事と体の関係を伝え健全育成を促す。
- ・食事と精神の関係を伝え健全育成を促す。
- ・初期症状の不登校傾向の生徒には、地域未来塾を活用する。
- ・教室に入れない生徒には、心の相談員を活用する。
- ・専門機関につなげたい場合などは、スクールカウンセラーを活用する。
- ・生徒の特性によっては、特別支援教室を活用する。
- ・地域や家庭での出来事に関しては、主任児童員や子ども家庭支援センターと連携する。
- ・触法行為に関しては、石神井警察等と連携する。
- ・子どもの保護が必要な場合は、児童相談書と連携する。
- ・キャリア・パスポートを有効活用し、進路に向けての意識を高める。
- ・職場体験を有効に活用し、学ぶ目的や働く目的につなげていく。
- ・地域の働く人の話を聴く機会を設定する。
- ・職層に応じて指導助言を行う。

（5）特別活動・その他の視点から

- ・様々な場や機会において、生徒主体となる活動を展開する。
- ・生徒がお互いを理解するためのソーシャルワークスキルを活用する。
- ・行事などを通して協働することの大切さを経験させる。
- ・個々の役割を通じて、責任感を育成する。
- ・部活動などを通して、個と集団の違いを認識し行動できるようにする。
- ・家庭への連絡は、教師の思い込みではなく事実に基づいたものを状況に応じて行う。
- ・生徒が地域の行事へ参加するように促す。
- ・地域未来塾や学校支援コーディネータを活用する。
- ・学校への理解を深める手立てとして、学級通信や学年だよりを有効活用する。
- ・どこに行ってもやっつけていける子を育てるため、地域人材と連携し、計画的に生徒を育成する。
- ・避難拠点訓練を活用し地域の一員であることを自覚させる。
- ・職層に応じて指導助言を行う。

（6）能力開発の視点から

- ・教師自身の専門性を高めるために、様々な研修に参加する。
- ・授業力を向上させるために、他教科での展開や生徒の動きを参観する。
- ・校内で多くの授業を参観し意見交換を積極的に行う。
- ・地域との連携を深めるため、地域ボランティア等に参加する。
- ・新学習指導要領における評価方法についてまとめ、説明できるようにする。
- ・最新の教育課題を知るために講演会などに参加する。
- ・校内で、学習指導法だけでなく教育について様々な研修を行う。
- ・多岐にわたる専門家を招聘し、様々な視点から深く掘り下げて知ることの大切さを学ぶ。